白蕉の詩稿をめぐって

平野和彦

前言

白蕉(一九〇七～一九六九)は、原名を何治法という。鄭逸梅『藝林散葉』(中華書局・一九八二)の3217則によれば、

何白蕉去姓不用、徑称白蕉、人誤以爲白姓。劉海粟早年亦去姓、徑称海粟、人誤以爲日本人。

という。何姓を棄てた理由は、それが宗教的理由によるものか文化大革命をはさんだ時代的背景によるものなのか、又は、別にこうした何らかの習慣や理由があったのかは定かではない。しかし、この人物が残す多くの中国現代史に関する論文(「袁世凱與中華民國」など『人文月刊』誌に掲載)や、画家として残した多くの主に蘭花を題材とした水墨画、魏晉の韻に通じた行草書、更にはその名を高らしめた詩、詞(著に『濟廬詩詞』稿本がある)は、すべて白蕉と署名している。

現代中国の文化史にその名を刻むこの人物の経歴については、未だその姿が全貌を現すに至らない。このたび筆者は、偶然にも白蕉の「蘭花扇面」(毛沢東の十八字令を題する)と「詩稿」に接する機会を得た。ともに小品、稿本であるところが珍品である。また、一九八八年、上海美術館で呉昌碩、任伯年、斉白石の三家展に併設開催された白蕉の個展は、魏晉の風致に新感覚の現代的解釈を加えた芸術的センスと技能を展示し、参観した際の強烈な印象は未だ脳裏を離れることがない。

本稿では、白蕉の詩稿を中心にその芸術的成果について概観したい。

一　翻刻「白蕉詩稿」

作品形状は、紙本、立軸。作品寸法タテ33,5cm、ヨコ31,5cm。五言律詩四首。行草墨書。

各詩は、三行にわたって書かれている。便宜上筆者が各句末に句点を付した。尚、各詩題は『　』内に入れた。また、鈐印七顆あり。それぞれ詩題行と末尾にある。その位置を示すため、当該行に印文を「　」内に、朱白の別及びそのスケールを録した。

『留滞』「幽思」朱文印、タテ5cm・ヨコ2cm。「江南白蕉」白文印、1,7cm方印。

留滞嗟何補。家園不可居。堂々白日去。落々故人疏。艸木年時意。乾坤兵馬餘。平生有微尚。頗挾萬言書。

『寄叔範浙中』「大吉」朱文印、1,2cm方印。

歷險聞無恙。如何絶好音。人經憂患老。思到別離深。斷續還鄉夢。栖皇報國心。知君情亦苦。對酒每呻吟。

『江浦』「虎變」朱文印、タテ4cm・ヨコ1,6cm。「蕉」朱文印、タテ1,4cm・ヨコ1,1cm。

江浦一衣帶。鄉關路未遥。米塩今日貴。児女昔年嬌。不飲盜泉水。愁聞呉市箭。王孫故流落。劍氣総難消。

『贈友』「白」朱文印、径2cm。

不作暄寒語。相親意獨深。時吟七八句。日或二三尋。適事無閒議。論文更細心。稜々好風骨。若與世浮沉。「江左白蕉之印」白文印、3cm方印。

二　白蕉の人物評

白蕉の、中国現代史研究に関わる学問的出自と詩、書、画、篆刻にわたる幅広い芸術的素養が如何にして培われたものなのかは、現時点においては明言を避けがたい。これは、現代中国の、それも文化大革命期間を生きた人物(この時期に限らず、中国近現代の人物については同様であるが)に言及する際の大きな壁である。しかし、幾つかの資料、論文、作品評などからその片鱗を窺い知ることは可能であり、そこで、本章では、先ず白蕉その人の人物について概観しておきたい。

以下に挙げるのは、主だった筆記及び辞典類から本稿に有益と考えられるものである。各項目は、白蕉その人をよく知る人物によって執筆されている。各資料には論旨の展開上便宜的に番号を付す。尚、掲載資料は、それぞれ簡体字表記であったり繁体字表記であったり、又、数字表記が漢数字、算用数字であったりするが、これも便宜上、数字は原文のままに、文字は繁体字表記に訂正した。

①『民國人物大辭典』(河北人民出版社・一九九一)

白蕉(1907—1969)原名何治法、字旭如、別署雲間、筆名白蕉、別號復翁、雲間下士、北山公等、上海金山人、1907年(清光緒三十三年)生。工畫蘭、能篆刻、善書法、曾任上海中國畫院籌委會委員兼秘書室副主任、中國美術家協會上海分會會員。主編《人文月刊》、1969年逝世。終年六十二歲。著有《雲間談藝録》、《客去録》、《濟廬詩詞》、《袁世凱與中華民國》等。

②『中國近現代人物名號大辭典』(浙江古籍出版社・一九九三)

白蕉(一九〇七—一九六九)江蘇松江人、亦作金山(今均屬上海市)。原姓何、名馥、又名復生、治法、字遠香、號旭初(一作原名)、亦號旭如。廢姓、以白蕉名行、字獻子、別號雲間(有印。著有『雲間談藝録』)、雲間居士、雲間白蕉、雲間下士、北山公、海曲居士、又別署復翁(署見1944『大衆』月刊、畫件)、濟廬(有『濟廬詩詞』)、濟廬復生、東海生、天下第一妄人、晩號不入不出翁。書畫篆刻家。工寫蘭、秀逸多姿。篆刻取法秦漢印、泥封。精書法、宗王羲之、獻之。尤以行書著名。曾執教于上海美專。新中國成立后、任上海中國畫院籌委會委員兼秘書室副主任、專任畫師。早年著有『袁世凱與中華民國』、『光緒帝之悲劇』。

③『中國當代美術家人名録』(上海人民美術出版社・一九九二)

白蕉　1907年—1969年、原姓何、名馥、字遠香、號坦如、別署濟廬復生、復翁。上海金山人。專工寫蘭、尤精書法、善詩。著有『雲間談藝録』、『客去録』、『濟廬詩詞』。曾是中國美術家協会上海分會會員、上海市工藝美術設計協會會員、上海中國書法篆刻研究會會員、上海中國畫院畫師、上海美術專科學校國畫系教師。

④『中國現代書畫家印款辭典』(世界図書出版公司・一九九八)

白蕉(1907—1969)本姓何、名治法。字旭如、號復翁、別署雲間下士等。上海金山人。擅長書法篆刻。出身書香門弟、幼時家中植蘭百盆、朝夕觀賞、極爲喜愛、曾取蘭就燈描影自娯、成爲他以後畫蘭基礎。書法宗二王、兼取歐、虞諸家。擅行、草書、學書極嚴謹、不論是技法還是前人的論書著述、他都認眞地鑽研。書作含蓄雋永、流暢娟秀。對書法繼承和創新有精辟的見解、自言:始欲無我、終欲有我。不僅長於書法、於詩文、畫蘭、篆刻均有很深的功力。自評:詩第一、書第二、畫第三。其畫雖評爲三、然極爲時所重。篆刻取法漢人、間仿宋、元、醇厚而古雅、但不輕易奏刀。解放後調入上海市文化局工作。生前爲上海市美協會員、上海中國畫院畫師、上海中國書法篆刻研究會會員。

⑤『民國篆刻芸術』(江蘇美術出版社・一九九四)

白蕉(1907—1969)白蕉本姓何、名旭如、又名復生、號白蕉、復翁、東海生、虚室生、北山公、無聞子、養鼻先生、海曲居士等。江蘇松江人。因松江古称雲間、故自號白雲間、借白爲姓、遂以號行、又雲號間下士。書法有晉人風致、小楷、行書、大草、縱逸蕭散、滌盡塵俗。論書多雋語、如穩非俗、險非怪、老非枯、潤非肥、審得此意、決非凡手。偶又畫蘭、絶有逸致。新詩、舊體詩皆精湛、曾自云詩成或在宋元時。亦擅倚声。曾主編《人文月刊》。1949年、白蕉爲在上海中國畫院畫師。曾撰《書法十講》、《書法學習講話》等、遺作及著

述先后在《書譜》、《書法研究》刊載。白蕉在民國期間、書名極大。四十年代中期、于南京太平路博覽會舊址開書展、某公從中作梗、險誤揭幕。后鄧散木斡旋其中、以白蕉治對印解圍。故時人謂、求其立軸難、求印則更難。白蕉篆刻取徑漢印、泥封、參酌權、量、詔版文字、有古秀蘊藉之趣。間仿宋元文人印法、愈發古雅醇厚、不同凡響。惟不輕易爲人奏刀、故其篆刻作品流傳甚少。

⑥**鄭逸梅『藝林散葉續編』(中華書局・一九九五)**

A『藝林散葉』

444則・白蕉論書、謂筆有緩急、墨有潤燥、緩則蓄、急成勢、潤取妍、燥見險、得筆得墨、而精神全出矣。

721則・白蕉早年作詩、頗自負、鈐一印、傳諸千秋。

844則・白蕉本姓何、廢姓不用。其女名白雪、亦廢何姓。

1488則・白蕉論書、謂穩非俗、險非怪、老非枯、潤非肥、審得此意、決非凡手。

2011則・白蕉曾北上訪齊白石、白石見白蕉題畫詩、大加贊賞、即伸紙爲作畫屏贈之、白石畫不輕贈人、此乃破例也。

3708則・白蕉謂暑日毒熱、此時墀婦子、謝客補臥、亦一大適意事。

3810則・白蕉論書、頗多妙語。如云、運筆能發能收、只看和尚手中鐃鈸。空中着力、只看剃頭司務執刀。又云、包愼伯草書用筆、一路翻滾、大是賣膏藥好漢表演拳模樣。康長素本是狂士、好作大言欺俗、其書頗似一根爛繩索。又云、學書始欲象、終欲不象。始欲無我、終欲有我。

B『藝林散葉續編』

676則・白蕉有袁世凱與中華民國一書、經古紅梅閣主評閱、古紅梅閣主者、吳中張一麐也。白蕉別有袁世凱的壓迫言論自由一文、載人文月刊。

988則・白蕉善行書、善畫蘭、又善韻語、記得其兩句、低昂時論誰爲主、掩映春灯盡是悲。風神獨絶。

⑦**陳祖範『近代書苑采英』(浙江美術学院出版社・一九九二)**

三十年代畫苑有過這麼一段掌故、大畫家徐悲鴻曾經陪同白蕉走訪白石老人。同道論藝、談言微中。席間徐悲鴻請白石老人爲白蕉畫芭蕉。老人執筆躊躇、說天下可歿有白色的芭蕉、畫緑色的吧、又太俗。你們看、畫一幅墨蕉如何?白蕉首先表示同意。老人興來之筆、使這幅芭蕉畫得極其出色。白蕉興沖沖地携回、懸作案前清供。一晃幾十年、直到文(1969年)毀于一旦。而這位著名詩人兼畫家也終于隨着逆風吹剥、魂系墨蕉、同帰撕灰。這段掌故是白蕉婦人金學儀所告知的。(部分)

⑧**金學儀『書法十講』前言(香港『書譜』総第三十一期・一九七九)**

白蕉夫君、生于一九〇七年十一月三日。自幼穎悟、酷愛書畫、畢生致力于藝事。少年時代、深下苦功、焚膏繼晷、寒暑不輟。書法專攻鍾王、墨蘭師法自然、擅寫名種極品。當年柳亞子先生見君書畫詩文、曾謂、「松江自古出人才。」君三十歳時、在上海主次學辦書畫個展、自此求教者日多。君于諸學子諄諄善誘、悉心施教、且每以「不求名利」勉之、常曰、「苟爲名利縈繞、則藝事掃地矣!非吾徒也。」。中年執教、爲徇時人之請、講解書法、乃有此《書法十講》稿。當時書畫社曾擬出版單行本、以利初學者、施以抗戰爆發而未果。五十年代、君任職于上海市文化局、上海中國畫院、終日奔波、稍無餘暇、竟未能將此稿親予修訂、實爲憾事!後來、君不幸于一九六九年二月三日齎志以歿、良深可嘆!享年僅六十一歳。値茲逝世十周年之際、將初稿又輯問世、聊作紀念。惟原稿作于抗戰之前(約一九三六—一九三八年間)難免有不符時代精神之處、爲尊重原著未加刪改、又當時對象只是初學者、文字未免粗疏簡陋、再、此稿僅是幸存初稿、加之當日抄寫者又多筆誤、所引古人著作、復乏資料校正、類此欠缺、幸惟編者、讀者批評指教、不勝銘感。此稿若于初學者有所幇助、亦足告慰夫君于九天矣!

⑨**『人文月刊』第七卷第八期四六頁・白蕉著『袁世凱與中華民國』(人文叢書)広告**

人文叢書　袁世凱與中華民國　初版存書無多、欲購從速

研究民國史者不可不讀

研究袁世凱者不可不讀

袁世凱於清季及民國政治舞臺上處何等重要地位、衆所俱知。本書爲金山白蕉編著、共十五萬餘言。於袁之乘時投機、貌爲中信、攘取政權之野心、排異己、對付政敵之手腕、陰謀帝制、掩耳盜鈴之運用、及種種欺世、辱國、禍民、與其失敗經過、莫不取眞憑實據、前後脈絡分明。故於袁之心術行事、造因食果、得此長編、讀者自可瞭然於目、憬然於心。至袁最大罪悪、以金錢銷鑠人心、墜人守操、使四維潰、囂風張、流毒後世、自釀凌夷、則本書實又不啻於民國政治舞臺上懸一明鏡！

本書内容、第一章是緒論、第二章是辛亥革命起後至任大總統時之袁世凱、第三章是二次革命前後之袁世凱、第四章是洪憲帝制前後之袁世凱、中間又分二大目、(1)是帝制之先聲、(2)是帝制之實現、取銷與袁世凱之死、第五章是餘論。其中從袁氏在清季被罷斥、再起及入民國後之陰謀詭計、前前後後、曲折變化之重要事實、蒐羅豊富、敍述醒目。呉門古紅梅閣主審閲後、褒爲信史、眉批尤多珍聞、其價値可想而知。故本書實爲研究民國史與袁世凱之第一部書！各大學學生治歴史者之重要參考書！凡關心國事者、不可不讀此書！全國圖書館、不可不備此書！全國行政界的公務人員以及有志青年、尤不可不讀此書！

◎凡直接向人文月刊社訂閲人文月刊者得享九折優待權利。本書精裝一厚冊二百餘頁實售國幣九角(外埠郵費及掛號費另壹角)

⑩鄭逸梅『南社叢談』(上海人民出版社・一九八一)

十四、南社詩選簡注「白蕉詩六首」(注は省略)

過呉家湾

我與清波意共閑、茸城西去飽看山。洞橋處處俱畫、植杖何人水一湾。

悼謝玉岑

清談莫憶西門路、絶藝難尋南國才。盡有文章能壽世、已無笑語到深杯。却翻墨札添新泪、剰覺庭除長緑苔。誰道麟鴻都化鶴、六年兩慟敵人來。

題寥天風雨圖

披圖此日更何詞、久識朱侯足孝思。(原注・朱履仁)兩様情懐揮涕泪、一般風雨到今時。

坐雨

席暖耽書坐雨時、閑摩茗椀有遐思。唐梅落盡山前路、只是頻年未入詩。

贈張琢人

此老眞如雲裏鶴、我詩争及澗邊春。何時重對一樽酒、細論五茸絶代人。

雑詩

山南山北皆青草、時去時來幾朶雲。清興我凭樽酒力、更看紅艶媚斜曛。

三　白蕉の学問と芸術簡評

さて、これら資料から窺うに、白蕉は早年から詩作を得意とし(⑥A—712)、自らは「詩第一、書第二、画第三。」(④)と評していたようである。それは、⑧に「當年柳亞子先生見君書畫詩文、曾謂、松江自古出人才。」とあるように、中国近代革命文学団体の一つ「南社」(一九〇九年成立・一九二三年解体)創始人の一人柳亞子(一八八七～一九五八)にその詩才を認められるほどの評価を得ていたようである。しかし、⑩の附録にある「南社社友姓氏録」には白蕉その名が録されてはいない。ただ、同じく⑩の附録「参加南社紀念会姓氏録」には参加者の一人としてその名が列せられており、「白蕉　原姓何、名復姓、今以白蕉行、江蘇松江人。工書、又擅繪蘭、詩有五字長城之目。人文月刊主干。」と紹介される。南社は上海を中心に活動し、その総社員数は千百八十余人であったというから、白蕉の生年(一九〇七)を考えても、南社後期の活動に間接的に関わったと見ることが出来よう。

鄭逸梅が「南社詩選簡注」に選んだ人物はあわせて三百三名。そのうち六首以上を収録したのはわずか五十二名で、ここに鄭逸梅の白蕉に対する評価の一端が窺える。

ちなみに、『南社詩集』、『南社詞集』を柳亞子が編集したのは一九三〇年。これは、もともと『南社叢刻』の原編に収録された詩、詞、文の三種の体裁に倣って三分冊にしたものである。原編の『南社叢刻』は、全二十二集で各集一冊。ただし、第二十二冊目の稿量が多くなり、上下二冊に分けたためにあわせて二十三冊となった。第五集の出版が一九一二年(民国元年)六月一日で、第二十二集の出版が一九二三年(民国十二年)と、二十年以上の歳月をか

けた一大詩、文、詞集である。しかし、印刷部数が少なかったために、しばらくすると購求することも難しくなり、やがて絶版となったという。南社の社友でさえ全帙を完全に保存している者がほとんどいなくなり、胡朴安が自らの蔵本を基に、一九二四年、『南社叢選』全十二冊として編集刊行したのである。しかし、胡朴安蔵本も、第一集と第二集が欠けており、第三集からの始まりとなっている。ただ、この『叢選』が『叢刻』と違うのは、作者氏名の下にそれぞれ小伝が付されていたことで、興味深い編集内容と謂われる(『南社叢談』八、南社叢刻的内容及其它匯刊)。

鄭逸梅は「南社詩選簡注」小序に、

我所選録的詩篇、當然是從『南社叢刻』中來、但不完全等同于『叢刻』、也和亞子和朴安的『詩選』、『詩集』有所岐異。…(中略)…南社後期有湘集、有新南社、有南社紀念會、這一系列的組織、都屬于南社範疇、我也兼收并蓄、合而爲一了。…(中略)…南社詩以柳亞子的風格爲風格。亞子是走龔定庵的路子、又復于雄奇奔放中滲進民族矛盾和階級矛盾的氣息、爆發出革命的花火。一般社友、往往馬首是瞻、跟着他走。在詩篇中、一方罵清王朝、罵袁世凱、罵軍閥集団、罵軍國主義侵略、一方面悼宋教仁、悼周實丹、悼阮夢桃、悼寧太一等社中烈士們、無不慷慨激昂、大胆地干着。那麼是不是所有南社社友的詩、統是這様一個類型?可以説、不是的、絶大多數、還是屬于山水田園派、他們寓有隱逸遁世的思想、沖淡閑適的情調、借詩來陶醉自己。也有些凭着靈感、逞着才華以詩而詩的。這個詩選、是不是可以把這些詩擯諸門外、不承認是南社的詩欸?不能這様做、那様就否認了它的歴史和時代的局限、不能反映它的全貌、是不符合實際的。

と述べる。見事な文学論である。けっしてイデオロギーに偏ることのない「以詩而詩」という文人的情緒や陶酔の世界をそこに見出そうとしたのである。確かに、政治史、思想史のみでは語り尽くせない文化史の観点がここにはある。白蕉は、自らの論文で袁世凱を批判的にとらえた。しかし、白蕉の詩才とはそこにのみ存在するのではなく、むしろ、詩そのものの芸術性にこそ存在するのであることを鄭逸梅の小序は教えてくれる。鄭逸梅が選んだ白蕉の詩六首は、まさにこの感性に拠ったのである。

また、書画に優れた才能を発揮したことは、①~⑧共通して記すところで、特に蘭の画と魏晋の風韻を得た書に長けていたようである。本稿の詩稿は、まさにその行草書の技芸の高さを見せてくれる。これについては稿を改めて論じたい。

篆刻は、⑤に「鄧散木斡旋其中、以白蕉治對印解圍。故時人謂、求其立軸難、求印則更難。白蕉篆刻取徑漢印、泥封、鬱酌權、量、詔版文字、有古秀蘊藉之趣。間仿宋元文人印法、愈發古雅醇厚、不同凡響。惟不輕易爲人奏刀、故其篆刻作品流傳甚少。」とあるように寡作だったようである。しかし、本稿詩稿の鈐印七顆と『近現代書畫名家印鑑』(上海書画出版社・一九九六)所載の九顆及び④所載の十二顆各印を観るに、漢印、封泥、古鉩印をよく学んだ跡が看取される。ちなみに、本稿詩稿の『寄叔範浙中』詩題下部の鈐印「大吉」印は④にも収録されている。また、④所載の「白蕉」白文印や『近現代書畫名家印鑑』所載の「白蕉私印」白文印は、確証こそないが鄧散木の手に出るものではないかとその刻風から窺える。鄧散木との交友の一端を紐解く鍵になろう。

中年以降教壇に立ったというが、②、③にあるように、それは上海美術専科學校國畫系でのことのようである。鶴田武良編『民国期美術学校畢業同学録・美術団体会員録集成』(和泉市久保惣記念美術館・一九九一)には、残念ながら上海美術専科学校の現任職員及び現任教授名の一覧にその名が見当らない。所謂専任教師ではなかった可能性もある。

一九六九年二月三日の逝去が文革によるものであったことは⑨、⑩によって明らかであろう。また、⑥によれば、「出身書香門弟」とあるので、書香即ち崔唯吾(一八九八~一九七五)の門下生であった可能性があるが、これは確証に乏しいのでひとまずその可能性を示唆するに留めざるを得ない。

歴史研究における業績は、⑨を一読すればその批判的精神に対する評価の高さが窺える。「呉門古紅梅閣主審閲後、褒爲信史、」とあるが、呉門古紅梅閣主とは、袁世凱の幕下にあって『北洋学報』の主筆を務め、その後軍機大臣を命ぜられて、一九一二年には袁世凱大総統府秘書長を任じた張一麐(一八六七~一九四三)その人である。その審閲を経て信頼に足る史書として宣伝されたわけであるから、民国史、袁世凱研究者必読の書として宣伝される

のも頷けよう。

以上、幾つかの観点を示したが、白蕉という人物は、民国の芸苑に欠くことのできない存在だったようである。現代史研究者としてはもとより、詩、書、画、篆刻において発揮したマルチな才能は、当時から衆人の耳目を奪う存在だったようである。

小結

多才多芸の人物には、必ずと言って良いほど自らの能力に対する厳しい自己批判がある。白蕉の場合、「詩第一、書第二、画第三」がそれである。この自評の辞が何時頃のものなのかわからないが、中国の多くの文人が発揮した多面的才能は、年齢とともに徐々にその順位を変えていくようである。

今日、白蕉の存在はその書の評価で広く知られるところである。『人文月刊』編集中にも、ある頁に余白が出来れば必ずと言ってよいほどそのスペースを「補白」欄として活用して自らの詩を掲載している。そして、その代表論文「袁世凱與中華民國」の連載にも、白蕉ただ一人だけが毛筆で署名をしているのである。中国現代史研究とその資料収集の合間に、幾多の同人と詩の交流を持ち、一方では、劉海粟など数多の芸術家を輩出した上海で、それも名門上海美術専科学校国画系で教鞭を執ったその経歴は、むしろ白蕉自身をして「書第一、画第二、詩第三」とでも言わしめるほどの芸境の展開ではなかったかと思われる。白蕉の書跡は、散逸してなかなかまとまった作品集が出せるような状況にはないようである。また、『濟廬詩詞』がよく話題に上るが、それも稿本で未だ公刊を見ないままである。

本稿詩稿にも見られるような穏やかな筆致から生まれるその詩境は、文革という時代にその壮年期から晩年へと向かう熟練の年月が流れたとは到底思えないものである。その、詩、書、画、篆刻、歴史研究という多くの顔は、中国近現代の人物交流史を紐解く上でも確実に貴重な存在であると言うことができる。

(二〇〇二年十二月二日受理)